

山と博物館

第31巻 第6号

1986年6月25日

大町山岳博物館



白馬大雪渓 河野齡蔵氏撮影

山岳写真と河野齡蔵

河野齡蔵は教育者であり、また植物学者として、更に信濃山岳会の創立に参画し副会長として活躍されたことはあまりにも有名である。しかし彼が日本最初の山岳写真家であることを知る人は意外に少ない。

昔、上高地温泉発行の絵葉書に古い河童橋の写真があるが、これは最近、彼の撮影したものであることが偶然にわかったのである。それは山岳写真研究者であり、元「岳人」編集長の杉本誠氏の依頼で、私が河野家に残されているガラス板の原板を調べているうちに河童橋の写真を見つけたのである。彼は明治四十四年、矢沢米三郎らと共に信濃山岳研究会を創立され、その記念展覧会にアルプス絵葉書五葉、山岳及高山植物写真十葉を出品している。またある時期、松本市の写真術研究会の会長となり営業写真家を指導しているのである。彼の残された原板の中には、白馬岳、槍、燕、八ヶ岳、戸隠など、更に遠く東北、北海道、千島樺太などの各地を撮影した極めて貴重なものが驚く程よく保存されている。なかでも特筆すべきは、当時既にカラースライド原板を作り、幻燈会で上映していることである。これは白黒のガラス原板に着色したものであるが、当時カラーフィルムがなかったので、植物学者は植物を究明にスケッチし着色しているのである。彼は絵をよくし雲峯の雅号を持ち、数多くの植物の絵を残している。

従来日本で最初に山岳写真を撮影した人は、当時長野中学の博物の先生、志村鳥嶺とされていたが、この度の杉本氏の調査で、河野齡蔵の明治三十六年八月の「赤石山嶺に於ける高山植物」が日本最初の写真であることが立証されたのである。そして当地方から彼に続き、大町市の手塚順一郎、松本市のリリー写真館の百瀬藤雄、私の父三寿雄らが、昭和初めに活躍するようになったのである。

本年八月には松本市で国際アルピニスト大会が開催され、その記念にキャビネ判以上のガラス乾板による「山岳写真展」が開かれる予定である。河野齡蔵はじめ各地の作家の作品が展示され、いろいろ大きな反響を呼ぶことであろう。

(槍岳山荘・槍沢ロッジ経営 穂苜貞雄)

河野齡蔵と信州理科教育

信州教育界と理科教育

明治政府が勧めた日本の近代化政策の一つに、学校教育の普及と教科、授業内容の西洋化があった。この政策に従って町や村に学校がつくられ授業が始まった。しかし近代的教育を受けた教師不足はまぬがれず、その為に教科毎に国家検定制度が生まれ、教員の不足をカバーする一方、各県には師範学校を創設して、正規教員の養成に努めることになった。長野師範学校もこうして明治一〇年七月発足した。

昭和の現在になっても、長野は教育県だが、信州教育の優秀さが県外人からよく言われるが、これは明治・大正期において、優秀な人材や優れた教育実績を上げてきたからである。

このような評価の中で、特に優れた実績を上げてきたのが理科教育で、中でも高山の動植物や地質についての研究は群を抜いており、それらの基盤は、長師卒の先生方や長師の教授陣によって受け継がれてきている。長師の理科教授陣は大半が同校卒の人達で、いずれも我が国の理科研究で名をなした人達ばかりである。明治時代を拾ってみても、羽田貞義(一八三三年) 矢沢米三郎(二二一三八年) 河野齡蔵(三〇一?) 折井最一(三三一?) 岡田邦松(三四一?) 八木貞助(三七一三九) 浜幸次郎(二一三三) などがある。

長 沢 武

これらの人達はいずれも学究肌の人達ばかりで、矢沢と河野は二二年三月卒の同級生。矢沢はそのまま母校に残って博物と地文の教壇に立ち、二八年には自然科学研究団体「長野博物学会」を作った。三〇年からは河野も師範学校の助教授に迎えられることに加わり、彼と河野が中心になって三五年には全県的組織の「信濃博物学会」を創設し、雑誌「信濃博物学雑誌」を創刊したところ、初年度に入会者は五八一人に達する程の盛況であった。また雑誌は大正二年迄に三九号を出し県下の理科教育の向上に貢献した。

この二人は、明治三八年三月、松本に女子師範学校が開校になると、矢沢は校長、河野は教頭として赴任、共に高山の動植物を研究



河野齡蔵

河野は明治三一年夏、植物学者として初めて白馬岳に登り、幾種類もの高山植物の新種や内地における新産地の発見をし、同岳の高山植物の豊庫なることを初めて世に紹介した人として知られ、北アルプスの全山を初め県下の山岳はもとより、遠く千島にも渡り寒地植物を研究した植物学のオーソリティーでもあった。彼は慶応元年(一八六六) 東筑摩郡島内村大飼新田(現松本市)の庄屋河野通重の四男として生まれた。教育熱心な父の影響を受けて齡蔵は

するかたわら、四四年八月には「信濃山岳研究会」を創設した。この会は後の信濃山岳会の前身で、発会祝いには女子師範を会場に三日間山岳関係資料展と講演会が開かれた。折井最一、岡田邦松と共に高山植物の研究家として知られ、著書もあるが、岡田は若くして病死してしまったことは誠に残念である。

八木貞助は地質学者として知られる。これらの人達をビークとして、当時の長野県教育の理科部門は、全国的に見てずば抜けて進んでおり、小中学校の先生に至るまでつぶぬいで研究熱心であった。

河野齡蔵とプロフィール

(1) 明治時代

明治大正時代を通じて、信州の理科教育、なかなか北アルプスを初めとして県下の山岳に数限りなく足を伸ばし、高山研究を進めた双壁は矢沢米三郎と河野齡蔵であった。この二人は教育者であると同時に、高山の動植物研究の第一人者であり、登山家でもあった矢沢については別の機会に譲るとして、河野のプロフィールについて紹介しよう。

河野は明治三一年夏、植物学者として初めて白馬岳に登り、幾種類もの高山植物の新種や内地における新産地の発見をし、同岳の高山植物の豊庫なることを初めて世に紹介した人として知られ、北アルプスの全山を初め県下の山岳はもとより、遠く千島にも渡り寒地植物を研究した植物学のオーソリティーでもあった。

彼は慶応元年(一八六六) 東筑摩郡島内村大飼新田(現松本市)の庄屋河野通重の四男として生まれた。教育熱心な父の影響を受けて齡蔵は

一八歳で小学校教員の免許を取得したが、さらに近代教育を学ぶべく明治一八年長野県尋常師範学校に入学した。

学生時代の河野は、生来の理科趣味、自然愛好精神に加え、矢沢米三郎らの影響を受けて植物に興味を持ち、飯綱山や戸隠山など近くの山へ採集登山に出掛けた。そして二二年同校を卒業すると同時に上水内小学校の訓導に任命された。しかし翌年は北安曇小学校、二五年松本小学校に転勤、三十年七月には母校師範学校の助教授に任ぜられると同時に、八月には大町小学校長として迎えられた。

大町小時代の河野は校長として、当時の女子は女工や子守りに出るため就学率は五%程度だったので、これをなんとかしようとして町に働きかけ、町費負担で教科書を用意し、授業料を免除して授業を進めたり、卒業生による同窓会組織を作り図書館を開くなど教育熱心で、理科教育についても陣頭指揮し、屋外に出て自然を相手に実践教育をした。

また個人的には同校へ赴任の前年の二九年には、文部省の植物教員検定に合格、植物の分類、特に高山植物の分類においてはエキスパートの域に達していた。

三一年夏の第一回白馬岳登山は彼の三三歳の時で、同行者は趣味を同じくする後輩の岡田邦松と吉沢秀吉であった。

岡田と吉沢は三〇年三月の長師卒で、二人は無二の親友であって、この年岡田は北安曇郡七貴小へ、吉沢は北城小学校に赴任、翌年には同校の校長となっていた。従ってこの二人と河野は同じ教育会の同志として顔見知りであったばかりでなく、岡田とは採集登山や植物研究を通じ親しい間柄であった。

河野はこの探検的登山の様子を、翌年「信

「濃教育」に載せると共に、「植物学雑誌」にも三三三三発表すると、全国の植物学者や山草家達の注目を集め、白馬岳は高山植物の豊庫として、が然有名になった。

河野はその後三四年五月には長師の教授を嘱託され、翌年の二月には師範学校及び中等学校の動物・生理科教員検定に合格、三月には下伊那高女の教諭に任ぜられた。

この年は河野にとつて、更に記念すべき年であった。それは矢沢と共に準備を進めてきた「信濃博物学会」の創立と、「信濃博物学雑誌」の創刊であった。この年は三号まで出版し、彼は同誌に毎号「動物の運動及び機関の作用」「雷鳥」について観察研究の結果を発表した。

三六年は赤石岳に探険登山すると同時に以後「信濃博物学雑誌」にはほとんど毎号研究の成果を発表し、信州理科教育に貢献した。三七年には博物学会の副会長に当選、赤石岳の他矢沢会長と八ヶ岳に登山「ヒナリンドウ」を発見した。また「女子用植物教科書」及び「動物教科書」を著した。

三八年は前述したとおり松本女師の教頭に赴任した年で、七月八ヶ岳、八月には白馬岳の他焼岳、穂高岳に登山、小学校の教員の指導を行った。また浜幸次郎と「女子用生理衛生教科書」「普通生理衛生教科書」「普通植物教科書」を著した。

四〇年にはそれまで鉢植えて研究してきた幾十種類かの高山植物の培養研究の成果を基に、松本女師の校内に高山植物園を建設、四年八月の、同校で開かれた「信濃山岳研究会」発会式には、培養した高山植物七五点を陳列好評を博した。

(2) 大正時代



東久邇宮殿下と白馬岳山頂の河野(右端)

大正時代に入っても河野の活躍には目覚ましいものがあった。彼の行動力と指導力と高い識見は、学校運営の他臨地指導、教科書の編集、博物学雑誌や信濃教育への寄稿と運営など、信州理科教育の向上に与えた影響は大きなものがあった。

大正二年四月上伊那農学校長として赴任した河野は、これを契機に中ア・南アへの植物研究登山を発売に行うことになる。二年八月は赤石山脈荒川岳に登山、スシウヒョウタンプクを発見、翌年の夏にも再び塩見岳に登山した他木曾駒ヶ岳にも二回登った。四年の夏は東駒ヶ岳、仙丈岳に登山した他、「山岳」や「信濃教育」に寄稿した。

五年四月には長野高女の校長に迎えられ赴任、この年は同校の女生徒を引率して白馬岳に登った他、東久邇宮殿下を槍ヶ岳にご案内したり「日本アルプス登山案内」を矢沢と共著で出版した。この本は当時の出版本としては異色で、高山の動植物を中心に書かれていて、十数版を重ねる売れ行きであった。

六年には続いて「高山植物の研究」を岩波書店から出版。夏には東久邇宮殿下を今度は白馬岳にご案内申し上げた。登山に先立ち北城小学校内にある「高山館」の展示物にて、同岳の高山動植物や鉱物についてご説明申し上げたが、この時乗馬のまま玄関まで入った者は、殿下のお附役宮内省の金井、服部事務官とご親戚の帝大生と河野校長だけで、郡長村長、警察署長などは歩いて入っているし、「高山館」に入室したのは殿下と金井事務官に河野の三人だけだったのを見ても、河野のおかれていた地位が分かる。

この夏は東北の蔵王、早池峯、鳥海山にも植物研究登山にでかけた。翌七年には北海道の大雪山、仙雲、トムラウシ、利尻、礼文の他千島国後まで研究に足を伸ばした。また八年には、皇太子殿下の善光寺行啓に際し、高山植物の幻燈を台覧に供し説明申し上げた他、樺太の鈴谷、突阻、樺保岳へ植物研究に出掛けた。

九年の夏は唐松岳、猿飛、池ノ平、剣ノ立山、佐良峠、薬師岳、黒部五郎、三俣蓮華、双六、笠ヶ岳の大登山旅行を十数日間を費し行った他、朝香宮殿下を燕、槍ヶ岳へご案内申し上げた。

十年は飯田高女校のロックガーデン築造の設計指導を行った他、「史蹟名勝天然記念物調査委員」の委嘱を受け、以後昭和に至るまでこの方面でも活躍することになる。



李王殿下と白馬岳山頂に立つ河野(右端)

一年には諏訪高女校長を拝命、一三年同校にて六〇歳を迎えたので教職を辞し松本の自宅に帰った。しかしまだまだ元気で、松本二中の先生をしたり、一四年には槍ヶ岳、一五年には乗鞍岳へも登り高山植物の研究を続けた。

(3) 昭和時代

昭和二年には「高山研究」を岩波書店から出版した。また三年には白馬岳及び乗鞍岳に登山し、氷河問題及び亀甲石を観察、翌年の「信濃山岳会報」にこの調査研究結果を発表した他、信濃郷土叢書「日本アルプス」を出版するなどこの年も数多くの研究発表を行い六五歳を過ぎてても少しも疲れを見せない活躍ぶりであった。そして昭和六年、六七歳の時

にようやく松本第二中学校の嘱託を解かれ、五〇年にわたる教員生活に終止符を打った。だが研究及び論文の発表はなおも続け、六年には「日本高山植物図説」を朋文堂から出版したり、七年の夏は信濃教育会からの委嘱を受け、寒地植物研究に千島利尻、礼文島、国後、中ノ古丹島など、一ヶ月余にわたる採集旅行を行った。帰ってくる間もなく、長野県博物館協議会が「信濃博物館」と改称すると推されて副会長になった。

八年の夏も信濃教育会の委嘱を受け六月から七月末日迄樺太の鈴谷岳、幌内川ツンドラ地帯を調査して北海道に帰り、夕張岳、大雪山に研究登山した。また幾回かの皇室の北アルプス登山のご案内で、宮家と親しくなった河野は、山草好きな李王殿下に請われ、那須の別邸に出掛けて大がかりなロックガーデンの築造を行い、高山植物や高山の樹木の植栽を行った。

九年は「高山植物の培養」(朋文堂)を著したが、この頃彼の自宅には千鉢近くの各種各地の高山植物が研究のために栽培されていた。たまたま八月松本を訪れた李王殿下が、この鉢物を台覧され驚嘆された。この年も信濃教育会の委嘱で東北の山、岩手、早池峯、鳥海山に研究登山した。また一一年(七十二歳)には李王殿下を案内白馬岳登山をした。このように昭和一四年七五歳で永眠するまで、高山研究一路に生きた稀にみる不死鳥の活躍ぶりには頭の下がる思いがする。

(登山史研究)

クタタメル

北アルプス東麓の方言(4)

福沢武一

三十年も前の春のこと、大町の奥地、鹿島の谷を訪れた。その入口の源汲にさしかかると、老人が目にとまった。道祖神祭りの準備をするところだった。近づいて、あれこれ尋ねた。忘れたいのはシヨシヤビ(おやつ)とクタタメル(叱責する)だった。このことは本紙二六卷二号にふれた。

シヨシヤビは次のものに由来している。スサビ(荒・進・遊)(一)心が特定の方向にいよいよ進むこと。また、心を、そのおもむくままに任せること。(二)心のおもむくままにする慰みごと。(小学館「日本語大辞典」)

スサビは「口慰み」の意で「おやつ」になった。語形は変化を重ねた。シヨシヤビはあじけない語音だ。七十歳を越える老人の口から発せられたことが最も印象的だった。一方、クタタメルの魅力は、生まれて初めて耳にする新奇さだった。帰宅して、改めて

一語の貴重さを知った。クタタメル 道理を言いふくめる。懲戒する。庄内(浜荻)、三重県度会郡礪波(東条氏全国方言辞典)そのずつと後、自然発生的に次のように考えた。クタタメルのクタタは、本来クタクタだったに相違ない。

クタクタ (一)疲れたり、弱ったりして力の抜けるさま。また、着物や紙などが、古くなつて張りがなくなるさま。(二)こまかくなるさま。(三)物が形を失うほどよく煮えるさま。(上掲大辞典)

これはクダクダ・グダグダ・グダグダの形でも多用され、右の(一)(二)のほかに、(四)繁雑で、わずらわしいさま、に当てられ、クダグダシイ(わずらわしい)の一語を生んだ。クタクタがクタタになった、といった。同類を若干あげる。——キラキラがキララ(雲母)、ウラウラのウララ、イトイトのイトド

(甚だ)、シトシトのシトド(ひどくぬれたさま)、タワタワのタワワ、等々々。語尾のメルは、「何々スル」こと。マルメル(丸くする)、細メル、薄メル等々。要するに、クタタメルの原義は、「事こまかに説得すること」。そこから懲戒・叱責が導かれた。

その後、小学館の国語大辞典が刊行され、クタタメルに次の出典が加えられた。ばうず二、三度はねはず。くたためられて川へはね入。(天正本狂言「せいとう」)

この稿をつづるについて、同僚の天野文雄さんに次の論考の教示を受けた。坊主が檀那に供を借りようとするが、誰もおらず、檀那が自ら供をして行こうと言う。連れて出かけると、「中に川ある。」檀那は跳ぶのだが、坊主は跳べず、とうとう「くたためられて川へはね入。」(橋本朝生氏「天正狂言本の出家座頭狂言」)

天正狂言本の成立は東北地方でないか? この説は学界で有力視されている。東北方言の目立つことが強力な理由になっている。クタタメルはその目ぼしい例だ。同じものが先に三重県に、新たに大町に拾われた。これは天正狂言本東北説に反省材料でなければなるまい。(昭六一・五)

(上田女子短大講師)



山と博物館第31巻第6号
 発行所 長野県大町市 一九八六年六月二十五日発行
 TEL 〇二二一
 印刷所 長野県大町市 大町山岳博物館
 大糸タイムス印刷部
 定価 年額一、二〇〇円(送料共) (切手不可)
 郵便振替口座番号(長野四一)三二一九三二